

東北大学法学部同窓会

會報

第 14 号

発行所

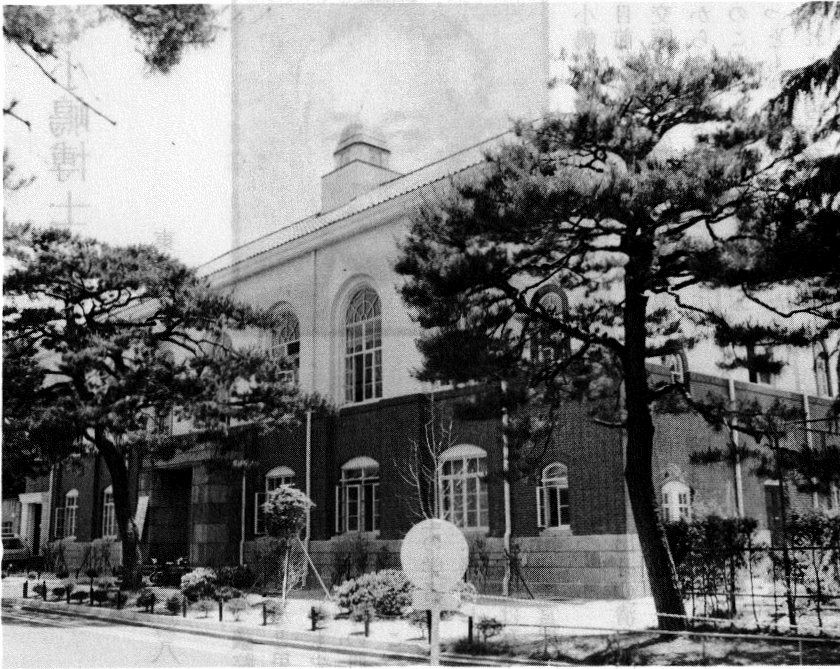
東北大学法学部同窓会

発行日

昭和62年6月30日

印刷所

今野出版企画(株)



東北大学記念資料室 (片平丁構内・旧図書館)



川内だより

会長 関口栄一

会員の皆さん如何お過ごしでしょうか。

今年東北大学創立八〇周年の記念すべき年に当たります。古ければ何でもいいというものではありませんが、東北大学の八〇年は誇るに足るものでありましょう。これを機会に全学の同窓生と母校の絆を強めるため、各部局同窓会の連合体として全学同窓会が発足する運びとなりました。会員の皆さんにもご賛同頂けるものと存じます。さしあたりこの六月二〇日に記念の行事として講演会と祝賀会が催されますが、昨年片平の旧図書館跡に移った記念資料室では資料展が開かれる予定です。

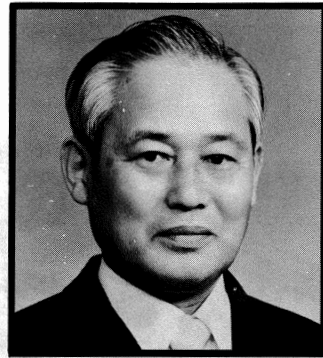
昨今大学入試のあり方が世上の話題に上がっています。よい学生が入ったと喜んでいられる大学もあると聞きます。法学部では東北と関東と現役が減り、中部、近畿と浪人が大幅に増えました。しかしよい学生かどうかは簡単には判断できませんし、もし結果がよくても今回の制度は欠陥が大きすぎます。すでに手直しの話も出ていますが、それよりは、長い目で根本的に考え直すことが必要ですし、さらにいえば、よい学生を入れる、よい大学に入る、ということだけがこれほど問題になるのは異常というべきで、少なくとも大学としては、よい学生を出すことにむしろ目を向けるべきでしょう。

すでにご承知の通り、この三月小嶋和司教授(憲法)が亡くなられました。停年退官直前のことで痛恨に堪えません。この三月は鈴木禄彌教授(民法)、外尾健一教授(労働法)が停年で去られ、佐藤慎一助教授(比較政治)も東大に移られました。法学部を担ってこられた方々が去られたのは淋しいことですが、幸いにも昨年度中すでに植木俊哉(国際法)、出岡直也(比較政治)の両助教授とカール・レンツ講師(ドイツ法)を、四月には柳父罔近助教授(政治学史)を迎えることができ、六月にはさらに山本和彦(民事訴訟法)、田辺国昭(行政学)の両助教授が着任される予定です。これで現員二九名になりますが、充実は今後も進む見通しで、心強い限りです。

(五月二〇日記)

小嶋博士の思い出

東北大学教養部教授 菅野喜八郎



小嶋和司博士は本年三月、定年

を目前にして他界された。博士との交際は、私が昭和四二年新潟大学からこちらの教養部に移って以来のことだから、二〇年に及ぶ。

もともと、博士の令名を知ったのはそれより古く私の大学院特研時代、昭和二七年頃である。当時私は何をテーマに論文を書くのか皆目見当がつかず五里霧中の状態にあったが、博士は解散権論争の一方の雄として切れ味のよい論文を矢継ぎ早に発表し、憲法学界の耳目を引いておられた。

私のように、天性、学界の動向に鈍い者もその影響で、この論争

と密接な関係を持つ議院内閣制をテーマにしようかと思いついた位である。もともと少し手をつけただけで、自分の肌合わぬと投げ出したが、この一事からも、博士の学者としてのデビューが如何に華々しかったか知られよう。博士は私より五歳年長、東大出身で宮沢門下である。

私は東北大出身の清宮門下。専門を同じくする者同志のつきあいは、同門であっても仲々厄介である。まして出身校を異にすると、よけい難しい。自分ではそう思っていないが衆目の見るころ、私には主角がわるそうである。四十年代の博士も、万人によって人格円満と認められていたという訳ではなかったようである。それなのに大した抵抗なしに親しくお付き合い願えるようになったのは、御自分の学問業績に対する博士の絶大な自信もさることながら、私への並々ならぬお氣遣の賜物ではな

ったか、と深く感謝している。

私に対してだけでなく、博士は他人への思いやりがある方であった。そのため却って煩さがられたことも無かったとはいえないが、博士ほど情の篤い人は珍らしい。

病床にあっても能く自分を抑え、時折見舞う私を困らせるようなことは一切口にされなかった。私と同じ立場だったらどうだったろうか、とつくづく考えさせられる。

博士は多趣味な方だった。こけし人形や陶器等、美術品について該博な知識と鑑賞眼をお持ちだった。創作能力だけでなく美の享受能力においても、人間には差がある。大分前のことだが、博士と京の街を散策して人間国宝クラスの有名な陶藝家の息子さんが経営している店に立ち寄って、お茶を振舞われたことがある。そのとき出された、私の眼から見ると何の変哲もない一つの煎茶茶碗に目をつけて譲ってくれぬかと交渉を始めた。お茶を運んできた店の奥さんは、これは義父の若い時の作品なので譲りできないと一応断ったが、博士の眼識に敬意を表してか、無償で呈上された。その時の天真爛漫な喜び様は、今でも昨日のこのように想い出される。

博士は良い意味での子供らしさを終生失われなかった人である。昨年五月、博士御夫妻と私共夫婦が京都見物をした。その折、法然上人縁の寺に詣で、上人が腰掛けたと伝えられる石に代る代る腰を下ろして写真を撮った。博士は狂信的な宗教者が大嫌いだだったが、智慧第一の御坊の誉の高かった法然上人を尊敬しておられた。石に腰掛けて記念撮影をしようと言いつ出したのは、博士の方である。こうした子供らしさがその業績をユニークなものにしたのではなからうか。既成観念や権威に囚われぬ柔軟な思考法と無類の勤勉さが、通説的憲法学に対し様々な反省を強いる小嶋憲法学を産み出した、と私は見る。病床にありながら自ら朱筆を執って再校まで終えられた遺著『憲法概説』は、小嶋憲法学の集大成として永く光芒を放つことだろう。それにしても、日に新たに、日々に新たに考えを押し進め自説の修正を躊躇されなかった博士に、せめてあと十年、学界をリードしていただきたい。これは、専門家としての私の感懐である。私の個人的感懐は、言うまでもない。遍界寥寥 知音稀ナリ (昭27年卒)

法文学部時代のこと

東北大学名誉教授 世 良 晃志郎



私は、昭和二三年七月、東北大学助教として仙台に来了。戦前、東北一周旅行で仙台に一泊したことがあるが、震災を受けたためであらう、仙台の印象はその当時からずい分ちがっていた。いたるところバラックが建ち並び、東一番

丁も舗装がなく、雨が降るとどろんどろんになり、長靴なしには歩けないありさまだったし、青葉通や広瀬通も、両側の家は一・二階のバラックが多く、通りの真ん中がチョッピリ舗装してあるだけだったので、風が吹くと猛烈なほこりがたち、「仙台砂漠」を現出していた。町の印象はあまりよくなかった。

大の研究室に通うのに片道二時間あまりを必要とした。それが、仙台では、下宿から研究室まで僅か一〇分ごとたりたのである。一日の稼働時間が今までの二倍になり、勉強もおもしろいほど能率があがった。もう一つの利点は、食料品が手に入り易く、物価が安いことであった。われわれ貧乏人にとって、当時の経済事情のもとでは、これはなによりもありがたいことであった。

さて、私が着任したのは「法文学部」の最後の年であったが、私はこの法文学部がたいへん気に入った。まず図書館であるが、書庫に、歴史学、経済学、社会学、哲学、思想などの文献がずらりと並んでいて、どの文献でも自由に利用することができた。これは、私にとってほんとうにすばらしいことであった。東大法文学部の書庫にも、法学以外の分野の文献もかなりあったが、私にとっては十分ではなかった。文学部や経済学部

の文献も利用できないことはなかったが、それには面倒な手続が必要であり、文献利用という点からいえば、東北大学のシステムの方がずっと便利で、すぐれていた。私は、今でも、少なくとも文化科学に関するかぎり、中央図書館での文献集中管理方式の方が望ましいと思っている。

私の着任後間もなく、文学科の河野與一先生が、例の和服姿でぶらりと私の研究室にやってこられた。そのときの先生の第一声は、「世良君、*res*とは何でしょう」というのであった。*res*というラテン語は、「物」、「訴訟」、「事件」、「権力」、「国家」等々、日本語にすると実に雑多な意味をもっているが、先生の質問は、これらの雑多な意味の根底にある始源的な意味は何かということだったようである。もちろん、駆け出しの私に答えられるような問題ではない。続いて中世ラテン語についていろいろ話をしてくださり、最後に「*Du Cange*は君の部屋に置いた方がいいようだね」とおっしゃった。*Du Cange, Glossarium mediae et infimae latinitatis* が私の部屋に入ったのは、このようにしてである。この本は中世・近

世ラテン語についての膨大な辞書であるが、中世資料を読むためには必須の辞書であり、当時東北大学には一部しかなかったこの本を譲ってくださったのは、ほんとうにありがたかった。河野先生は語学の天才であり、その後も難解な史料の読み方について、何回となく教えていただいた。

法文学部であったために、文学科や経済学科の先生方や学生諸君ともよく付き合った。終戦直後の時代であり、今まで禁圧されていた思想や理論が解禁され、学問の世界でもいろいろな考え方がぶつかり合い、一時はたいへんな混戦状態を呈したのであるが、このようなときに、いろいろ専門のちがう人たちと議論し合えたということとは、私にとっては大きな収穫であった。

法学科の教授・助教授の先生方は、私の着任当時、私を入れて全部で一三名であった。もちろん、私が一番の末輩である。今の法学部が三〇名前後のスタッフを擁しているのと比べて、なんとも小さい規模であった。しかし、少数ではあるが、質の高さという点からいうと、先生方は第一級の人たちであった。私たちの時代には、学

生のころから、少なくとも旧帝国大学の法学の先生に関するかぎり、大半の先生方の書かれたものを読んでいたので、どの大学のどの先生がどういう点ですぐれていられるかについて、われわれなりの判断をもっていた。私自身の関心のもち方も関係するが、とりわけ勝本正晃、中川善之助、木村亀二、清宮四郎、高柳真三、柳瀬良幹の諸先生は、私がかねてから敬愛していた先生方であった。清宮、高柳の両先生を除いて、これらの先生方には仙台に来てはじめてお会いしたわけであるが、「ああ、これがあの先生か」ということを確認でき、あまり違和感をもたなかったのもそのためであろう。とはいえ、まるで事情の分からない初任者の私に、学部や学科の事情を教え、面倒をみてくださったのは、私に次いで若かった折茂豊助教であり、感謝している。

すでに物故されていた栗生武夫先生は、「西洋法制史」の私の前任者であり、先生の書物はすでに大部分を読んでいたが、私の判断では、先生は、当時の法制史学者の中で、群を抜いて偉い先生であった。おそらくマルクスを読まれており、マックス・ウェーバーの

影響のあとも歴然としており、伝統的な法制史のあり方に疑問を感じていた私は、先生の学風を受け継ごうと闘志を燃やし、栗生後継者であることに大きな誇りを感じたものである。

法文学部であるから、正規の教授会は「法文学部教授会」であるが、法学科においても、「昼食会」の名のもとに、実質的な法学科の教授会がもたれていた。法学科、文学科、経済学科が実質的に決めたことには、よほどの例外の場合を除いて、正規の教授会は干渉しないのが建前であった。さて、当時の法学科では、小町谷、中川、木村の三先生が「三長老」と呼ばれ、大きな権威をもっておられたが、いずれも学問、人物ともにすぐれた先生方でありながら、残念なことに、お互い同士あまりお仲がよくなかったようであり、このことが、時として「昼食会」の議論にも影響することがあった。そして、このようなとき、私は、若気のいたり、一番の若輩であるにもかかわらず、かなりぶしつけにいろいろと発言した。ところが、長老の先生方は、たいへん寛容にも、私の青くさい議論の多くを受け入れてくださり、私は恐縮する

とともに、先生方のお人柄の良さにも感激したものである。もっとも、少しあとになって気がついたことであるが、実は高柳、柳瀬両先生が、長老の先生方との間に立っていろいろとおとりなしくださっていただいたようであり、これまた感激のいたりである。

お付き合いいただいた先生方は

杜の都に学びて

弁護士 坂本吉勝

おむね酒がお好きであり、この点でも法学科は居心地がよかった。終戦直後のことであり、酒は必ずしも思いどおりには手に入らなかった。そこで、「昼食会」で「飲み会」の提案が出たりすると、清宮先生など相好を崩して賛成しておられたのを思い出す。

昭和四年の三月は私にとって憂鬱な春であった。東大医学部の試験に失敗してしまったので、東北大の法文学部に一応入学して後のことを考えようという気になって、友人で当時二年生の、後に私の生涯の親友になった谷山輝雄君を尋ねて意見を求めた。彼は「東北ってとていいぞ。是非やってみよう」といって、しきりと私の仙台行きを勧めてくれたので、私もその気になって試験を受けに未だ見ぬ仙台に出掛けた。幸い試験は合格して、四月開講に間に合うように仙台に行き、谷山君の紹介で向山の静かな部屋のある下宿屋に世話になることになった。「自

分は今運命の別れ道に立っている。今まで遊び暮らした高校時代の夢を精算して一生に一度の勉強に打ち込んで見よう」と悲願を立てた。東北大はあたらしい大学なので施設などもまだ整っていないが、教授達は若く研究心に燃え学生達のリーダーに相応しい。この強い胸を借りて一人前になりたいというのが私の偽らざる心境であった。大きな階段教室の一番前列の教壇の真下を自分の定席と定めて毎日そこに座り込んだ。ここは一般の生徒は敬遠して座らないのでここが私の定席のようになっていた。教授方がみんなすぐ真下の私を見下ろして講義をしてくれてい

るような感じなので、居眠りをする暇もなく必死に頑張った。初めのうちは、場合によっては来年も一度東大医学部を試みようかなと迷っていたが、一ヶ月経ち、三ヶ月が過ぎる頃には、今まで理科の講義ばかり聞いてきたので聞きなれない法律用語に戸惑っていた。講義が済んでから前にいる先生をつかまえて疑問の点を質問する。時には教授室まで追い掛けて行って納得するまで尋ねて見る。

こんなことを続けているうち、当時東北の三羽鳥といわれた石田、勝本、中川の三先生と親しくなり、時々私宅まで押し掛けて行って学習外の話に聞き入るといった次第であった。私がこの時代どうしてこんなに法学に熱中したのか今でもよく判らないが、大学の先生方と談笑の内に法学のさわりの部分が勉強できるというのは、当時としては、東大などでは夢にもできないことであって、それが私には大きな魅力であったためかもしれない。しかし、私ばかり勉の権化となった訳ではなく、休日にはスキーを担いで、蔵王連峰を滑り廻ったり、吾妻連峰の奥で吹雪に閉じこめられ雪穴を掘って一

夜を死ぬ思いで明かしたり又当時初めて東北大に出来た管弦楽団でフレンチホルンを吹いたりして元氣を取り戻したものである。東北大学山岳部の部屋は工学部の片隅の空き倉庫のようなところであったが、昼休みの時間には山好きの連中が集まって、東北の山やスキーの旅のことをあかずに喋るのが実に楽しい思い出であった。東北の山もスキーもその頃は今のように通俗化せず、東北大学の学生の独壇場であったような気がする。そして部員も純粹で敬虔な気持ちの良い人達が多かった。中でも小川登喜男君は経験とい人柄といいすぐれたリーダーであった。一方、音楽部の部屋は医学部の教室の空き時間を使わしてもらい、当時としては東北に珍しい管弦楽団を組織し、小さいながら熱心な部員が集まって、一週一回位の夜の練習を楽しんだ。指揮は斎藤さんという医学部の助手がされたと覚えている。当時のことであるからモーツァルトやベートーヴェンの易しい曲を演奏したと思われるが何を何時演奏したかは記憶していない。

仙台の向山の親切な老夫婦のいる下宿を途中でやめて、近くの一

高の仲間が「ラッコ山塞」と称して集まっていた家に移り住んだ。六人程の先輩後輩が親達からの送金をその多少を論ぜずぶち込んで、同じ飯を食い、同じ酒をのみ互いに青春の氣迫をぶっつけ合って誠に楽しい日々を送ることができた。

ここで寮の主ともいべき素晴らしい先輩に出会うことができた。前に述べた先生方を学問の師とすれば、彼は生活の師であった。後にフランスの政治学者デュギーの日本における唯一の後継者として、知る人ぞ知る中井淳氏であったが「オヤジ」の名で皆から親しまれていた。寡言の彼は仲間がまつとうなことをしていればニコニコと笑っているが、分にふさわしくないことをすれば、険しい目でギョッとにらむ。彼に睨まれると暴れん坊の仲間でもちぢみ上がったものである。彼の教えは「人間は自慢するな。貧るな。けちをするな」であった。彼の信条に心から共感した私は、とうとう金持ちにもなれず、まあまあ的人生を送ることができたと思っている。

下宿と教室と図書館の間を往復する三ヶ年は夢のようにすぎたが、その間の勉強のライバルには、後に専修大学法律学部教授の打田

峻一君やわが国最初の女性の法学士で公正取引委員会委員となった有賀美智子君などがいた。打田君は卒業後も弁護士として又法律学教授としてずっと付き合ってきたが、不幸にも昨年病気で倒れてからは時々見舞う程度で残念である。一方有賀君は当時は話さえしなかつたのに、後年になるほど親しく付き合うようになり今では私の法律事務所協力者としていろいろの助言を頂いている。

古くから杜の都と呼ばれた仙台は静かな学問、文化の町として、ネッカーの川のとりにある静かな学問、文化の町ハイデルベルヒと比較される。数十年経ってから、ここを訪れた私は、何となくこの二つの町を結びつける雰囲気を感じとったが、後者が依然として古いドイツの文化を今にその保持ちつづけているのに、仙台は新しい開発の波に吞まれて喧噪のなかに没入して私の記憶の中に横たわる往年の姿は見られず、老書生の嘆きを一入強からしめるものがある。日本もドイツも先き頃の大戦によって共に祖国を失いかけた国であるのにこのような差が出ることを考えて、私達日本人はもう一度一國の文化というものに深く想いを致

す必要があるのではなからうか。さわあれ、法律の世界に広く深く目を開かせてくださったすばらしい先生方、温かく厳しく見守ってくれた良い先輩や仲間達、教室で良いライバルとして一緒に学んだ学友達のおかげで、私は三年の時に高文司法科試験に合格することができ、後に在野法曹として八

学生時代の思い出

—昭和二二、二三年頃—

東北大学教養部教授 加藤 永 一

十一才の今日までどうやら自分の信念に従って生きてくることのできたと思う。これもすべて、はからずも私の若き日の夢を托した東北大のおかけであり、かつてここに生活し活動した恩師、先輩友人の方々のおかげであって、すべてに対して心から深い感謝と恩恵の念を禁じ得ない。(昭7年卒)

最近、中川善之助先生の最終講義のテープをいただきました。昭和三六年二月四日、片平丁構内にあった旧法文一番教室でなされた名講義のさわりの部分が納められています。あの時は、広い一番教室が立錐の余地もないほど沢山の人が見えていました。テープから「今日は私の最終講義の日で…」と流れますと、教壇での先生のお姿が思い起こされます。この講義は、法学部の先生方、先輩、学生が聞いていましたが、いま東北大学教養部で経済学を教えている平野教授も、経済学部の学生なのに、この最終講義をうけたそうです。

広い範囲の人々が聞かれたようです。中川先生がどれだけ敬愛されていたか、これでわかりますが、それだけではないようです。当時は、経済学部でも、専門外の講義もよく聞くように勧められていて、平野教授もそれを地で行ったものようです。これは多分、法文学部時代からの伝統がまだ色濃く残っていたからでしょう。私達の学年が入学したのは昭和二二年四月で、このような伝統の強い旧制の東北帝国大学法文学部法律学科でした。当時は、法文・理・医・工学部の四学部だけで、農学部は新設されましたが、学生

募集が遅れ、確か七月ごろに入学してきたと記憶しています。医学部だけが当時の北四番丁構内にあり、あとは全部片平丁構内にありました。私達が入学した年には、哲学の高橋里美先生が法文学部長をされておりました。当時の中央講堂で全学の入学式が行われた後法文学部だけの入学式があり、高橋先生の訓示がありました。法文学部の意義をとくに強調されたように記憶しています。狭く専門に偏らない学生を育てるのがその理念だったようです。その伝統が強かったせいか、法科の講義を文経の学生が聞いたり、私達が文経の講義を聞いたりしました。当時は、気のあった中川先生の講義や、経済原論の安井琢磨先生の講義などは、一番教室で法文経の三学科の学生が熱心に聴講していました。私達が入学した頃の法科の先生方は、憲法の清宮先生、行政法の柳瀬先生、日本固有法の高柳先生、民法一部の津曲先生、民法二部の勝本先生、民法三部の中川先生、商法の小町谷先生と伊沢先生、刑法の木村先生、社会法の石崎先生、民事訴訟法の斎藤先生、国際法の小谷先生、国際私法の折茂先生の諸先生でした。私達の在学中に勝

本先生が京都大学に(もっとも連続講義は続けられました)、小谷先生が広島大学に転ぜられました。入替わりに西洋法制史の世良先生が赴任されました。中川先生はじめ創設以来の先生がまだ多数おられました。

これらの先生方の講義のほか、政治学や刑事訴訟法などの講義もありましたが、非常勤の先生の講義か、連続講義(いま正式には集中講義と呼ぶのだそうです)でした。昭和二二年度には、東大の堀先生の政治学、都立大の松平先生の政治学史、九州大学の祖川先生の外交史のほか、清水幾太郎先生の社会学などの連続講義がありました。なかでも祖川先生の外交史や清水先生の社会学などが評判になっていました。昭和二三年度では、関西学院の大石先生の国家原論の連続講義や、仙台高裁長官の垂水先生が改正されたばかりの刑事訴訟法を非常勤で毎週講義されたことを記憶しています。

私達が入学した頃は戦後の混乱期で、食う物もろくにない時代でした。法文学部の先生方にも、構内を畑にして見事な野菜や藪を収穫された方がおられたそうです。昭和二〇年七月一〇日の空襲で、

法文学部の建物も戦災をうけ、幸い焼けのこった法文一・二・三番教室で、法学や経済関係の講義が行われていました。一番教室は、四百人も入る大きな階段教室で、二・三番教室の上であり、教授の講義する教壇が、今のビルでは二階位にあたる高さで、学生の席の一番高いところはビルの四、五階に相当する位でした。もちろんエレベーターなどはありません。いつも空腹を抱えながら階段を昇り降りしてました。昭和二三年度には木造二階建の建物ができあがり、新しい教室と法文学部事務室とに使われていました。民法二部や刑事訴訟法、社会法など二年目の講義を、この建物の教室で受けた記憶があります。

私達の世代の学生時代は、戦後の混乱・過渡期の時代でした。また、それだけ自由な考え方ができる時代でもありました。入学して一月ほど経ってから、法科会の歓迎会が催されました。先生方と学生との交歓がありました。もう取壊されてなくなった第一研究室の屋上が会場で、先生方は椅子に座っておられました。学生はコンクリートの床にじかに腰を下ろし、午後の熱い陽射しをまともにうけながら、先生方のお話を聞いた記憶があります。どなたが出席され、どんなお話をなされたか、詳しい記憶はありません。ただ、有名な中川先生にお目にかかれるのを楽しみにしていたのですが、当時、先生は司法法制審議会の起草委員で出張され出席されませんでした。心残りを感じたことを覚えています。先生方のお話を私なりに理解して印象に残ったことは、闘志と批判力とを十分に高め蓄積できるようになれば、たとえ法律学の勉強でなくともかまわないということでした。法学に限定されなかったことが意外に感ずるとともに、その度量の大きさに感銘をうけました。これは、当時の法文学部的感覚の現れなのかもしれませぬ。勝本先生が、民法二部の講義をカントの言葉の引用で締め括られたときにも、同じような感銘をうけたのでした。

私達は、二五年三月に東北大学法学部を卒業しました。法文学部に入学しながら、法学部を卒業しましたのは、昭和二四年に学制が変わったからです。旧制の帝国大学が新制の東北大学に衣替えし、同時に法文学部が文・法・経三学部に独立し、教育学部も新設されたのです。東北大学には、文・教・法・経・理・医・工・農の八学部が設けられることになったのです。初代法学部長は中川先生でしたし、当時の学長は高橋里美先生でした。卒業証書にはお二人のお名前が記されています。卒業後は中川先生のもとで研究生生活を送っていたいただき、昭和三八年に教養部に転じましたが、学生時代から数えれば、四〇年も東北大学にい

久し振りの最終講義

る勘定になります。先生方からは、学問のみならず、多くのことを教えていただきました。人生そのものを教わったという過言ではありません。この原稿を書くため、乏しい記憶を辿っていきながら、自分の考え方の基礎がこの時代に作られたということをつくづく感じさせられています。改めて先生方の学恩の深さに感謝している次第です。

(昭25年卒)

ことし三月で定年退官されて、名誉教授となられた外尾健一先生の最終講義が、一月十七日、法学部一番教室で行われた。

最終講義は、聴講席を出した学生以外にも何らかのPRをして、ある程度公開して行われる。昭48の斎藤秀夫先生、昭59の庄子邦雄先生以来のことであった。

しかも今回は、最終講義としては珍しく一般公開だったため、学生のほか卒業生や教官も含めて、約三百人が詰め掛け、教室は満員の状況であった。

「労働法学の四十年」と題して先生ご自身の少年時代の思い出に始まり、戦争体験を挟んでの学生時代、仙台に赴任されたところから現在に至るご研究をふりかえり、多様な価値の併存する日本社会の特徴を踏まえての学問の在り方及んでのお話しは、聴衆に多大の感銘を与えた。

講義の後、学生からの花束贈呈があり、盛大な拍手に送られて教室を出られたのであった。

(取材・事務局長)

同窓会総会報告を兼ねての

東京支部会便り

小幡 常 夫

東京の桜は近年稀な好天気続きで長く花を見せ、長閑な春を迎えております。数多くの新学士諸君が東京圏に就職され、支部会の将来にとって誠に頼母しく、全員が入会されることを期待しております。去る十月には、会員総人数三千四百を超す新支部名簿が出来上がりが発送されました。転勤・役職変更・これらに伴う電話番号の変更等思いの外に頻繁で、とても追いつけない状況です。会員各位のこまめな異動報告を頂くことで、より正確を期したいものです。尚賛助広告の掲載に御協力を頂きました十九社の幹部会員各位のご好意に対し、紙面をお借りして厚くお礼を申上げる次第であります。

さて六十一年度総会は、十二月三日、銀座第一ホテル十五階のルミエールを借り切って挙行されました。昼間の街の雑踏と趣を異にした夜景の眺望は仲々の風情であり皆さんに嬉ばれました。師走の多忙のせいも、当日欠席の方が意外に多く、出席者は百二十名にとどまりましたが、極めて盛会でありました。本年度は、本部と東京支部会合同開催の年に当たり、本部では収支決算報告と同窓会役員改選が、支部では業務報告・会計報告が早速やに進められ、異議なく承認されました。新会長となられた関口学部長からは、同窓会総会開催について、東京支部への謝辞と、最近の法学部教授陣容に就いてお話があり、その後で、大学の内部で医学部方面から呼び掛けのある、各学部同窓会の連絡構想について触られました。この件は二十数年前に一度発会を見、記念事業も行われ、規約も残っているものの、立消えとなっており、ことに総合事務局の維持問題が絡むだけに、当支部会としては暫く本部の動向を慎重に見守ることになろうかと思われまます。

が、若い紳士諸君に囲まれて交歓されました。大先輩のテール周辺で、又肩を組み合う友人達の前では、カメラがバチバチ。こうしたスナップ内容は良き思い出として、各人のアルバムに収められていることでありましょう。

(昭14年卒・東京支部事務局長)

山形支部

佐藤 精 一

当支部は、会員数一〇二名(昭和六十一年五月末現在)で、その構成は、県関係四六名が最も多く、以下企業関係三十名、大学及び高校関係十一名、自営業十名、県OB三名、法曹二名となっており、卒業年次は、昭和七年の大先輩を筆頭に昭和六十一年までに及んでおります。皆さんそれぞれの分野において、トップ、管理者、中堅、若手として活躍されており、誠に頼もしく心強い限りです。

これらの方々が毎年少なくとも一回は一堂に会し飲みながら懇談することとしておりますが、これになかなか思うにまかせない。やるからには各界から多数お集まり願いたいところですが、それぞれ重責を帯びて県内全域で東奔西走

の身、日程調整と出席者の確保に頭の痛いところです。六十一年は六月にこれを実施しました。参会者は二十名程度、もつとほしいところですが万障繰り合わせてくださった方々ですので感謝いたしてあります。

皆さん久しぶりの顔合わせに、思い出話し、将来への抱負、各界の情報交換等つきない話に時間の経つのを忘れる有様でした。これには、本部からも小嶋和司教授(憲法)の特別の派遣をいただき花をそえていただきました。(本部事務局のご配慮にお礼申し上げます。)

世の中、変転著しい昨今、各界の情報が何にもまして頼りになるもので、先輩、同輩、後輩ともども同窓のよしみ、人脈なる財産を大いに活用してこの会を盛り上げてゆきたいと思っておりますのでよろしく御協力をお願いいたします。

ここまで書いているとき、小嶋先生の計報に接しました。ついこの前、あのお元気なお姿に接し、いろいろとご教示いただき、一同感銘を深くしたところでしたが、これがまさか最後の機会になろうとは神のみぞ知る。先生のあの温

顔がきのうのこのように眼の前に浮かんでまいります。まだまだご活躍いただけるところでしたのに痛惜にたえません。私も、先生のご指導にいささかなりともお応えすることでご恩返しをさせていただきます。ここにお誓い申し上げます。

(昭22年卒・山形支部長)

宮城支部

佐々木 尚介

昭和六十一年度宮城支部総会は、例年より日程を少し早めて、十月三十一日に市内広瀬通りのホテルリッチ仙台・蔵王の間で開催されました。同窓会総会が東京開催の年にあたり、今年は宮城支部単独での開催となりましたが、六十名を越す出席で大変盛会でした。

定刻六時を少し過ぎて、津軽支部長のご挨拶に続き、同窓会長の関口法学部長から、大学や法学部の現況についての紹介と、全学同窓会再発足の動きがあることについてなどを交えたご祝辞があり、議事に移りました。

会計報告ののち、支部役員改

選、本部役員のうち支部推薦にかかる理事について、それぞれ満場一致で可決され、議事を終了しました。

続いて恒例となった同窓生による講演にうつり、独眼竜政宗のドラマにより賑わっている仙台市博物館長東海林恒英氏(昭三十三年卒業)が、博物館が昭和六十一年三月新装開館してその初代館長となったことについての抱負、博物館と伊達家の関わりについて、とくに、東北の雄藩伊達家に伝わった貴重な文化財とその変遷について博物館所蔵品の紹介を交えながらのお話があり、短い時間ではありましたが、参会者に多大の感銘をあたえました。

最後に懇親会となり、ご来賓のスピーチでは、高柳真三名誉教授が昭和四十一年三月定年退官して以来の思い出について、鈴木禄彌教授が、高柳先生が退官された年から東北大学に籍を置き、近く定年となること、さらに藤田宙靖教授のお話などがあり、これに続き先輩・後輩の別なくなごやかに杯を挙げながらの懇談となり、夜の更けるまで語り合ったのでした。

(昭32年卒)

職場だより

東京銀行

菅谷 弘

現在東京銀行には総勢三十八名の東北大出身者が居りうち法学部は二十五名を占めております。

当行は仙台に拠点を持つていないことから東北大の学生にとって知名度が低く採用時には苦労しますが、それでも毎年二名ぐらいは入行しており、その活躍ぶりは行内外で高く評価されております。

法学部OBによる定例会は特にありませんが、海外転勤者が発令された時など適宜オール東北大会合をもっておりこの四月二十七日には久々に集合致しました。

今回は、三浦器允(昭三十八年)がニューヨーク東銀信託へ、横山啓司(昭四十七年)がニュージールランド・ウェリントン駐在員事務所長へ、また加藤大典(昭五十九年)が米国へ留学することになった。これでおりに三氏の壮行会を兼ねたいに飲みかつ議論致しました。これで東北大OBの海外勤務者は十四名三分の一が海外に居る勘定

です。

海外勤務には子女教育等悩みも尽きませんが日本を外から冷静に見るチャンスが与えられることは人生においてなかなか得がたい経験の一つと思われれます。

筆者の私事に亘り恐縮ですが、私は六年近くロンドンに暮らし、正直なところ我国に対する評価というものは経済的に評価されていても総合的評価は今一歩、本当の意味で国際クラブ入りにはまだ時間がかかるといのが実感でありました。現在直面する経済摩擦の遠因にはかかる我国に対する評価と相互理解のギャップがあるのではないでしょうか。(近時のマスコミは依然我国中心でややエキセントリックに論評している点はいささか気になるところです。)それだけに今こそ海外赴任するビジネスマンは良き民間外交官としての意識を持つことが求められているのではないかと考えます。

さて前置きが長くなりましたが以下諸氏の活躍ぶりをご紹介致します。

まずは同窓会会長小林国泰東銀リース常務(昭三十一年)ロンドン・オランダの勤務が長く現在は当行最重要関係会社経営の要とし

て東奔西走の中、後輩の良き相談相手として慕われております。

佐藤洋夫バリ支店長（昭三十二年）はミラノ支店長時代日伊親善に努力した功績で伊政府より功勞勲章を叙勲された。通算十年余に及ぶ仏・伊勤務で当行の南欧のエキスパートでもある。

広瀬川をネッカーの流れに見たて、片平界限にアルトハイデルベルグの趣を感じとっていたというロマンチスト、蛇口浩敬（昭三十六年）は現在八重洲通支店長、ドイツ・スイス通算十四年の勤務で当行きつてのドイツ通、最近の欧州の金融の新潮流を本邦で実践に注力中、高砂弘幸（昭三十六年）は香港カオルン支店長として地元企業取引に実績を挙げております。吉岡龍太郎国際企業部次長（昭三十七年）はニューヨークより帰国後も多国籍企業との取引企画を担当、最近では米国企業の東北地方への誘地にも意欲を燃やしています。

筆者が入行時僅か十名余であった東北大出身者は今や四倍近くの規模にまで増加してきました。当行には学閥を意識させない自由な雰囲気がありますが、先輩の活躍ぶりは大きな励みとなることは事実であります。

字数の制約から中堅若手の現況をお伝えできないのが残念ですが最後に佐藤雅春（昭四十七年）は、東銀従業員組合委員長として組合員の牽引車として活躍していることをお伝え申し上げ、来年から多くの後輩が入行してくることを祈念し報告を締めくくらせて頂きます。（昭46年卒）

山形県庁

豊かな山形県造りめざして

金内良一

山形県庁の法学部同窓会員は、現在四八人であり、県支部である青葉会総員一〇五人の約半数を占めている。

我等会員は、県庁の各部署において、諸先輩、県庁OBであり、県支部長をしておられる佐藤精一、社会福祉事業団理事長（昭二二）、高橋和雄副知事（昭二八）らの御指導をいただき、全力で山形県発展のために努力している。

両先輩の他に一般職では、今野一成人事委員会事務局長（昭三〇）五十嶺薫庄内支庁副支庁長（昭三一）、板垣義次高速交通対策室長（昭三二）、今井登貴三郎計量検定所長（昭三五）らが幹部職員と

して活躍しておられる。

ところで、県庁の会員を年次別に見てみると、昭和二〇年代が二人、昭和三〇年代が六人、昭和四〇年代が七人といずれも一桁なのに對し、昭和五〇年代は二九人と一気に多くなっている。その中でも五五年から五九年の間は毎年五六人程が入庁しており、昭和六〇年代以降も二、三人ずつがコンスタントに入庁している。こうした若い会員が二一世紀の山形県を担っていくことになるのであり、誠に心強い限りである。

さて、我等会員は、毎年一回開かれる支部総会である青葉会と、県庁の東北大学同窓会であるといふべい会（事務系職員で構成しており総勢一二七人）の春の総会と十一月の最終土曜日に開かれる忘年会で集い、大いに飲み、大いに語りあっている。こうした宴席においては、同じ大学、同じ学部の先輩、後輩として、県庁の建物の中ではできないような話や議論、そして種々の個人的アドバイスをいただいている所であり、宴会の前には緊張していた新採職員も終わりには打ち解けて、諸先輩と二次会へというのが常である。

現在、本県では、昭和六七年度の

国体開催、高速道路と庄内空港の建設、テクノポリスの指定、JR長井線の第三セクター設立、農業の振興のあり方等行政上の諸問題が山積している。こうした厳しい環境の中で、我々東北大学法学部の出身者が同窓生としてのきずなを更に深めつつ、知恵と汗を出し合い、誇りと自信を持って豊かな山形県を造るため、努力して行こうと一同決意しているところである。（昭50年卒）

同期会だより

三〇周年記念

同期会の記

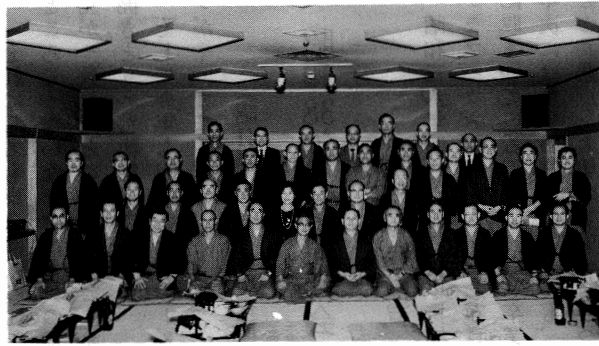
石川 悌二

三〇周年全国大会と銘打った、わが期（昭和二七年入学）昭和三一年卒業）の同期会が、昨年（昭和六一年）一月一八日、箱根湯本富士屋ホテルで、盛大に開催されました。天候にもめぐまれて、全国各地から馳せ参じた同期生の数、合計四二名。昭和五六年の秋保温泉での会合から五年ぶりの集まりです。

櫻の並木が根付きはじめた頃の仙台を去ってから、丁度、三〇年、

揺籃の思い出にひたるのに、時間ははいりません。

午後六時、開会。八島幸彦君(当時、警察庁交通局長)の音頭で、先ずは乾杯。髪のおとろえ(?)はかくせぬものの、酒の強さは昔と少しも変わりません。あとは、すぐ、「やあ、やあ、久しぶり」と、わいわいがやがや。



やがて、一人宛一分の持ち時間の

の「近況報告」となりましたが、なにせ、卒業以来はじめての出席という人もおりまして、大幅なタイムオーバーです。引縮まった雄雄しい顔、柔和な悟り切ったよ

うな顔、憂愁をおびた弧高な顔。

それぞれに、三〇年の年輪が刻まれているものの、どこかに、片平丁時代のおもかげが残されておられます。なにげない仕草から、そのおもかげを見出したとき、ほほえみを禁じ得ません。

談論風発。さすが法学部出身者の集まりとあって、そこいらの「久闊を叙する」程度の酒宴で終わるわけがありません。全員参加の二次会でも、まだものたらず、各部屋に散ってからも、大声が飛かい、箱根の連山に朝日が照るまで、名残がつきなかつたようでありま

す。翌朝、流れ解散となり、昨夜の疲れものともせず、ゴルフ組がいの一番に出発して行きました。

(ちなみに、仙石ゴルフコースでのゴルフは、増田一之君、ディーゼル機器(株)取締役が優勝しました)秋の箱根路の散策に、はたまた、野外彫刻の鑑賞に、それぞれが名残をおしみつつホテルを後にしました。

これからも、わが期の、「青春」の同期会をいつまでも続けて行きたいと念じつつ筆を置きます。

(昭31年卒・弁護士)

昭和41年卒同期会

奥山利雄

我々法学部四一年卒は、六年前前に入学二十周年を記念して全国の同期生に呼びかけ、片平丁の旧法学部前に集合した後、大挙して東鳴子温泉田中旅館へと繰り出し、なつかしくも楽しい歓談の時をもったが、その時以来、お互いの消息が比較的よくわかるようになり、仙台だけでなく東京や大阪でも時々何人かが集まっては旧交を温めているようである。

仙台あるいはその近辺に居住している同期生は意外に少なく、十名を少し越える程度である。

半数以上が企業などの仙台支店勤務であるため、毎年二、三人位の出入りがある。従って同期会は会員の誰かが転勤する際の送別会のような形になるケースが多い。

昨年四月には清水建設仙台支店の寺嶋昭士氏が東京に転勤することが決まったのをキッカケに、急遽数名が集まった。

田中温泉の若奥様に納まっている高橋(旧姓小宮山)良子さんも、はるばる駆け付けてくれたお陰でいつにも増して話に花が咲いた。

集まったメンバーがそれぞれのルートで得た同期生の消息を紹介すると、必ず他のメンバーから「彼奴は学生時代と変わっていないなあ」とか「頭の毛が薄くなる位苦労しているのか」などのコメントが続き止まることを知らない。

ところでこの席でちょっと興味深い事柄が話題になった。それは、最近の仙台においては、東京への逆単身赴任ともいうべき現象が増えているのではないかと

いうことである。仙台は札幌と共に支店経済の町といわれ、外からの単身赴任者が多い。単身赴任者用のマンションも続々と増えて来ているのも事実である。

しかし、我々の周辺には仙台に家を建て、家族を残して首都圏、あるいは関西方面へ単身赴任する人が結構存在している。今回の寺嶋氏が、自分自身そうであると話したら「実は私も仙台に居を構えたので今後の転勤はそうなる」とか、「家族が希望するので仙台にマンションを買ってしまった」とかの話が相次いだのだ。

大都市としての基盤整備が進み、高速交通網の整備により首都圏とも短時間で往き来できるよう

になった今日、逆単身赴任現象は着実に増加していくものと思われ、その際我々のように学生時代に仙台で過ごしたような者たちがパイオニア的役割を果たしていくことが間違いない。

「それにしても東京は人の住むところじゃないなあ」と全員の意見が一致したところで同期会はお開きとなった次第である。

そして今年も四月の転勤シーズンがやって来る。

(昭41年卒・仙台市役所)

昭和38年入学同期会

板垣興治

昭和三八年四月、元駐留軍将校クラブハウス前での入学記念写真に収まっている百四十六名。卒業年次には多少の違いはあるが、この共通点を大切にして、ひとつ集まってみようじゃないかと、昨年十一月二十二・三の両日、仙台近郊秋保温泉に、ほぼ二十年ぶりで我々の初めての同窓会が開かれた。

久しぶりのみちのくの秋。澄みきった高き空に、突き出した銀杏の木の頂きから光る木葉が一枚、二枚と舞始めている。ふと思ひ出



す。よくねころんだ川内の草っばら。こんなに無為に過ごしているのかという焦りと、あのすばらしい自由のたまらなさ。

結局出て来たのは二十四人だけになってしまったが、四十数名の旧友から、次回こそはぜひ、皆によるしくとたよりがあった。

コの字型に席につき、まず起立して物故者に黙祷を捧げた。在学中に一人、そして実社会の荒波の中で二人。どうかやすらかに眠って下さい。

ひとりひとり前へ出て話すことにした。話の中味もそれぞれにい

いが、その姿や表情から、彼の存在はあの時のあの場面で、自分の心にクロージングアップされているなぞと思いつつ聞いている。

しかし彼が立って話し始めたとき皆は一瞬とまどい、次に記憶の糸をたどり、たどり。ああ彼だったのか。彼は在学一年も経ずして闘病生活に入った。一度だけど見舞いに行ったことがあった。二年後復学して卒業。航空会社に就職してやがて結婚。ところが事情あって彼は再び大学生となった。それも医学生として。彼は今医者である。皆は彼の運命に軽い驚きと、またこれらを乗り越えてきて、今淡々と笑顔で話していることに一種の爽快さを感じた。部屋に戻っての二次会。そろそろ深刻になり始めた持病について、特設相談コーナーがいつの間にかできてしまった。人生において気の置けない弁護士と医者の方を友達として持つことのありがたさ。

翌日もまた青天で清々しい。次回は二年後、いや五年後がいいとか、東京でやろうとか言いつつ、百万都市を標榜して年々立派になつた。仙台から三々五々帰って行った。

(昭42年卒・仙台市役所)

東北大学全学 同窓会再発足

今年六月をもって創立八十周年を迎える母校と同窓生の緊密な連絡と親睦を図るため、昨年来、石田学長の呼び掛けで論議されていた全学同窓会が、再発足の形でスタートした。各学部別同窓会から推薦された準備委員による数次の会議の結果、四月十六日に正式に発足、二十年後の百周年事業のためのステップと位置づけられた。

当面六月二十日に開催される創立八十周年記念パーティーを主催することになっている。本同窓会からは阿部純二教授と東海林宮城支部事務局長が役員となった。

事務局だより

新年度になるとまず、会報の編集発行が事務局としての仕事始めとなる。会報には会費の納入依頼状を同封する関係で、住所の確認、訂正、会費の状況の調査、会報の原稿の校正、紙面の割りつけなどの仕事で忙殺される。

今年の名簿の発行の仕事が待っている。忙しい一年になるだろう。会員の皆様のご協力に感謝しつつ編集を終わる。(事務局長)